福祉健康科学研究（16）129-138，2021

原著論文

新型コロナウイルス感染症の休校措置による A小学校児童の心とからだへの影響と今後の取り組み

ー児童の実態調査に着目してー

国藤　ゆかり[1)]　・　藤本　太陽[2)]　・　中村　雅子[3)]

福山平成大学
1）スポーツ健康科学研究科（大学院生）
2）福祉健康学部　健康スポーツ科学科
3）福祉健康学部　健康スポーツ科学科

E-mail：y.k9210515-@outlook.jp

【要旨】

新型コロナウイルス感染症の子どもへの影響に関する研究はまだ十分されておらず、知見が得られていないのが現状である。

そこで本研究は、新型コロナウイルス感染症による休校中のA小学校児童の心やからだの実態調査をし、現状と学年の傾向から今後の学校での取り組みの方向性を明らかにすることにより、学校での感染予防教育や子どもたちの不安軽減をする教育の一助としていくことを目的として行った。

結果として、児童の新型コロナウイルス感染症についての知識と予防方法の習得や、新しい生活様式に即した予防対策の定着が十分とは言えなかった。また、学年が上がるにつれて様々なストレスに対処する行動につなげていない実態が明らかになった。このことから、今後の学校での取り組むべき課題として、①新型コロナウイルス感染症についての学年実態に応じた感染予防教育、②新しい生活様式を子どもたちが自ら実践し、定着していくための指導、③子どもたちのレジリエンシーを高め、相談に関するスキルを身につけさせる教育、があげられた。

キーワード：小学生、新型コロナウイルス感染症、健康実態

1. はじめに

2019年12月に中国湖北省武漢で発生した新型コロナウイルス（COVID-19）は、2月には31の省で感染が確認され、急速な勢いで中国全土に感染が拡大した[1]。

同時に、世界各国へも感染が広がり、2020年3月初旬には4000名を超える死亡者と110を超える国と地域で感染者が確認され、WHOがパンデミックを宣言（3月11日）する事態となった[2]。

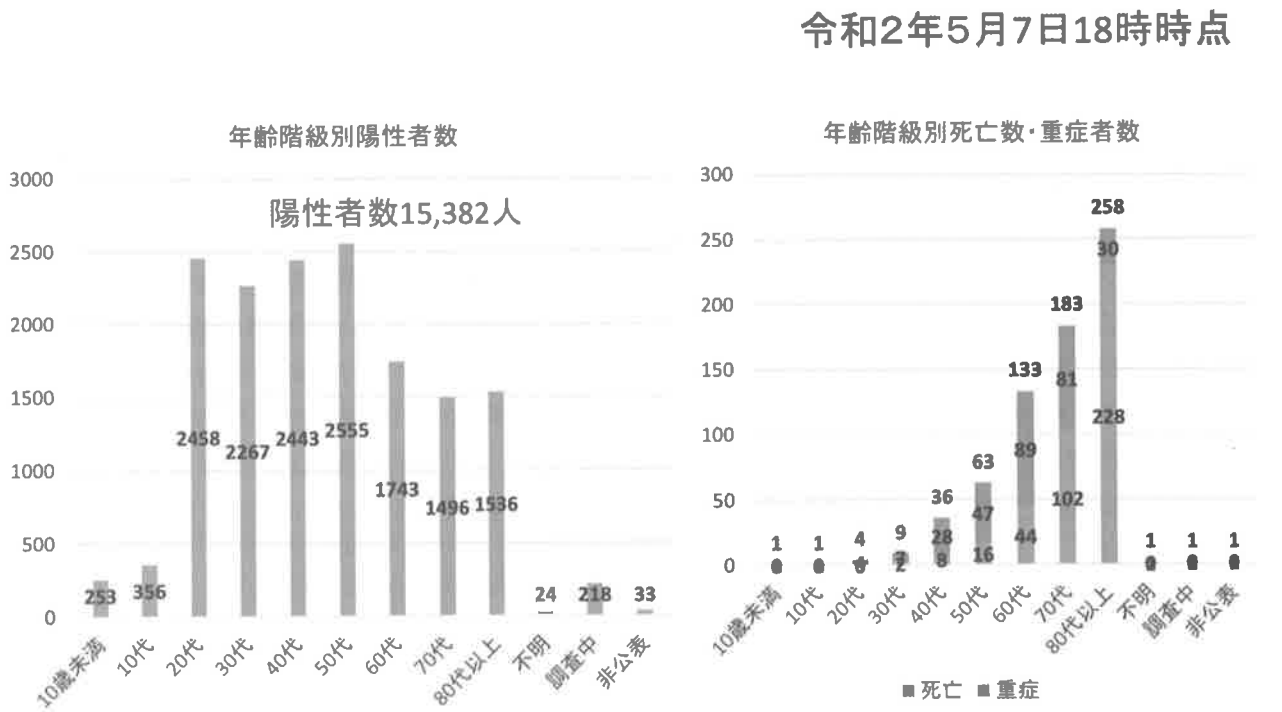
日本では、何よりも子どもたちの健康・安全を第一に考え、多くの子どもたちや教職員が、日常的に長時間集まることによる感染リスクに予め備える観点から、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における全国一斉の臨時休校（2020年3月2日から春季休業までの期間）を要請する方針が内閣総理大臣より示された（2月27日）[3]。その後春季休業を経て、政府の緊急事態宣言（4月7日）が行われたことや全都道府県が緊急事態措置の対象となったこと（4月16 日）等を受け、大部分の学校で5月末まで臨時休校が延長になり、トータルで約3か月の休校となった[4]。

この長い休校の間、子どもたちは家庭の中で時間に縛られず、外出も自粛して生活することとなった。そのため、日常とは違う生活を送ることとなり、食事・休養・運動の乱れから、子どもたちの心とからだの健康面に大きな影響が出ているのではないかと考えられる。

新型コロナウイルス感染症の学校における集団発生報告は、国内外においても稀であり、2020年5月7日18時時点（図1）では、小児年齢の発生割合、重症割合はともに小さいとされている。

2020年6月の学校再開にあたっては、休校明けの子どもたちの健康面に留意しながら、この新たな感染症とともに生きていくために、文部科学省（2020）[5] は「3つの密を徹底的に避ける、マスクの着用及び手洗いなどの手指衛生など基本的な感染対策を継続するなどの新しい生活様式を導入し、感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減しつつ、教育活動を継続し、子どもの健やかな学びを保障していくこと」を通知している。

本感染症については、いまだ不明な点が多く、有効性が確認された特異的なワクチンは存在しないことや、学



死亡率（%）

全体	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
2.6	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.6	2.5	6.8	14.8

図1　出典:厚生労働省作成資料（同省ホームページ）

校での感染拡大にかかる科学的エビデンスが蓄積されていない状況にある。また、新型コロナウイルス感染症対策の子どもへの影響に関する研究は、まだ十分されておらず、知見が得られていないのが現状である。

2. 研究目的

新型コロナウイルス感染症よる休校中のA小学校児童の心とからだの健康実態結果から、現状と学年の傾向から今後の学校での取り組みの方向性を明らかにすることにより、学校での感染予防教育や子どもたちの不安軽減をする教育の一助としていく。

3. 研究方法

（1）アンケート調査

1）調査対象

A小学校児童2年生以上に、自記式記名式質問紙（自作）でアンケート調査を行った。1年生は入学してすぐに休校になったため、理解が難しいと考慮し、対象から除外した。人数は、表1アンケート調査人数の通りである。

表1　アンケート調査人数

	男子（人）	女子（人）	総計（人）
2年	58	57	115
3年	47	44	91
4年	43	43	86
5年	50	38	88
6年	58	55	113
総計	256	237	493

2）調査時期

調査時期は、2020年5月末（学校再開前の分散登校中）とした。

3）調査内容

調査内容は、①新型コロナウイルス感染症の予防知識（3年生以上：2年生の担任教諭から2年生児童に休校明けの5月末時点では児童によっては回答が困難との意見が出され、対象から除外した）、②ストレスについて（2年生以上）、③日々の予防行動やその他の生活について（2年生以上）とした。

4）統計処理

統計ソフトは、College　Analysisを使用した。学年別比較については$\chi 2$検定を行った。その際、有意確率を$p<0.05$とした。

5）倫理的配慮

アンケート調査内容については、学校長の許可を得て行った。また個人を特定するような情報はなく、実施する際には担任教諭が児童にわかりやすく説明した。結果については、教職員、保護者、児童への指導以外で使用することはない。

4. 結果

（1）新型コロナウイルス感染症の予防知識について

「コロナウイルスとは何か知っていますか」は、「知っている」が3年生75.8%、4年生75.6%、5年生63.6%、6年生77.0%であった（図2）。

「コロナウイルスはどのように広がっていくか知っていますか」は、「知っている」が、3年生65.9%、4年生63.9%、5年生59.1%、6年生83.2%であった（図3）。学年別で$\chi 2$検定を行ったところ、感染の仕方について知っている割合が6年生が有意に高い結果となった（$\chi 2(6)=14.41302, P<0.5$）。

「コロナウイルスが自分や家族にうつらないようにするためにどうしたらよいか知っていますか」は、「知っている」が、3年生80.2%、4年生65.1%、5年生56.7%、6年生77.9%であった（図4）。学年別で$\chi 2$検定を行ったところ、予防の知識を持っている割合が3年生と6年生が有意に高い結果となった（$\chi 2(6)=17.59717, P<0.01$）。

（2）ストレスについて

「なかなか眠れないことがある」は、5年生以外は「少しある」が最も多く、全学年で43.8%であった（図5）。

「むしゃくしゃしたり、いらいらしたり、かっとしたりする」は、3年以上で「少しある」「とてもある」が50%以上であった（図6）。

「何もやる気がしないことがある」は、3年以上で「少しある」「とてもある」が50%以上であった（図7）。

「ごはんがおいしくないし、食べたくないことがある」は、全学年が「ない」が最も多く、全体で83.2%であった。（図8）。

「頭やおなかが痛かったり、体の調子が悪かったりする」は、「ない」が2年生は48.7%であったが、3・4・5・6年生は60%以上であった（図9）。

（3）日々の予防行動やその他の生活について

「手洗いはせっけんで指の間や手首まで洗う正しい手

洗いをしている」は、全学年で「あてはまる」が最も多く、全体で78.3%であった（図10）。

「マスクは正しくつけるようにしている」は、全学年で「あてはまる」が最も多く、全体で89.6%であった（図11）。

「家族以外の人とはできるだけ近づかないようにした」は、全学年で「あてはまる」が最も多く、全体で65.2%であった（図12）。

「人と人との間はできるだけ開けるようにした」は、全学年で「あてはまる」が最も多く、全体で67.9%であった（図13）。

「朝ごはんを毎日食べている」は、全学年で「あてはまる」が最も多く、全体で87.2%であった（図14）。

「毎日寝る時間と起きる時間が決まっている」は、「あてはまる」が2年生50.4%、3年生46.2%、4年生37.2%、5年生38.6%、6年生41.6%であった（図15）。

「ゲーム、携帯、インターネットなどをやりすぎないようにしている」は、「あてはまる」が2年生54.7%、3年生56.7%、4年生37.2%、5年生42.0%、6年生44.2%であった（図16）。

「自分の気持ちが落ち着くやり方を知っていてそれをやっている」は、「あてはまる」が2年生50.4%、3年生41.1%、4年生40.7%、5年生34.1%、6年32.7%であった（図17）。学年別で$\chi 2$検定を行ったところ、気持ちを安定させる方法を身に着けて実践している割合について学年に有意差が見られ、学年が上がるにつれ低くなっている（$\chi 2$（8）＝19.44369,P＜0.1）。

「だれかに話を聞いてもらいたいことがある」は、「あてはまる」が2年生30.7%、3年生28.6%、4年生24.4%、5年生22.7%、6年10.6%であった（図18）。学年別で$\chi 2$検定を行ったところ、だれかに話を聞いてもらいたい割合について学年に有意差が見られ、学年が上がるにつれ低くなっている（$\chi 2$（8）＝28.25590,p＜0.01）。

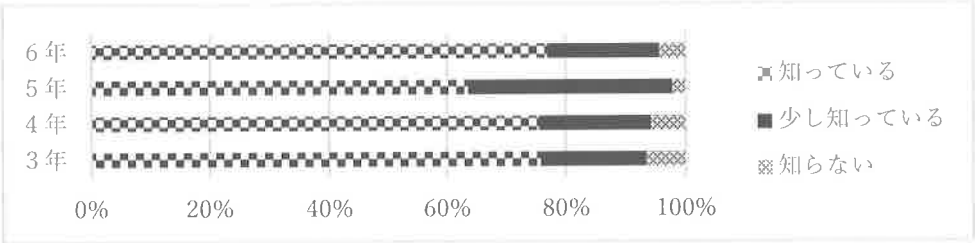


図2　コロナウイルスとは何か知っていますか

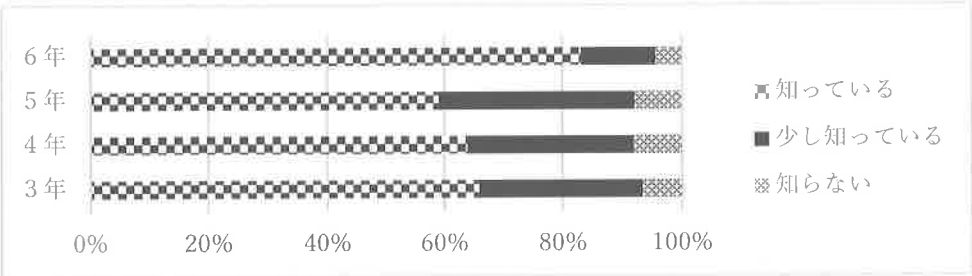


図3　コロナウイルスはどのように広がっていくか知っていますか

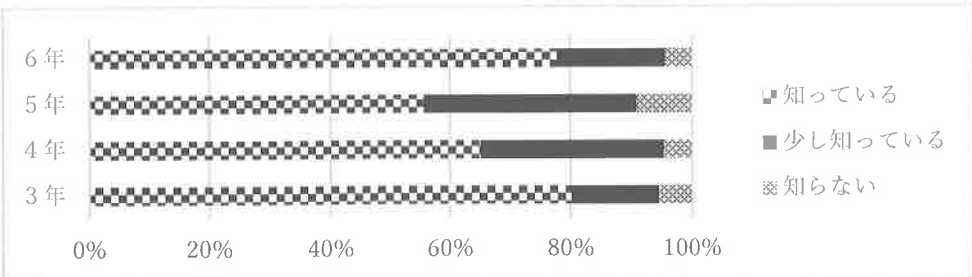


図4　コロナウイルスが自分や家族にうつらないためにどうしたらよいか知っていますか

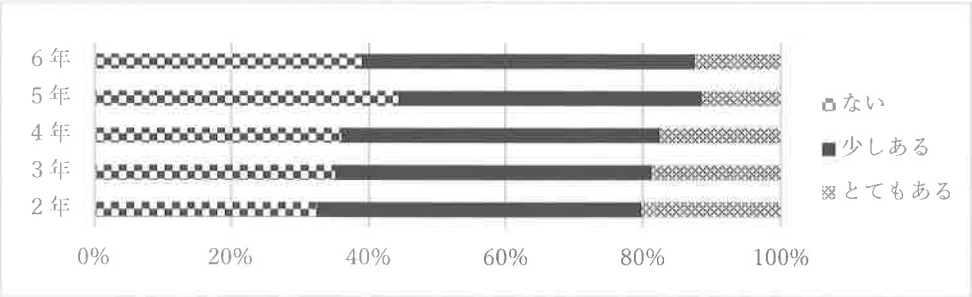


図5　なかなか眠れないことがある

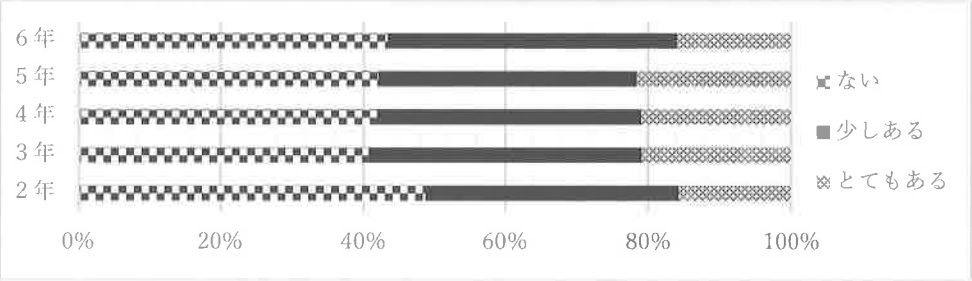


図6　むしゃくしゃしたり、いらいらしたり、かっとしたりする

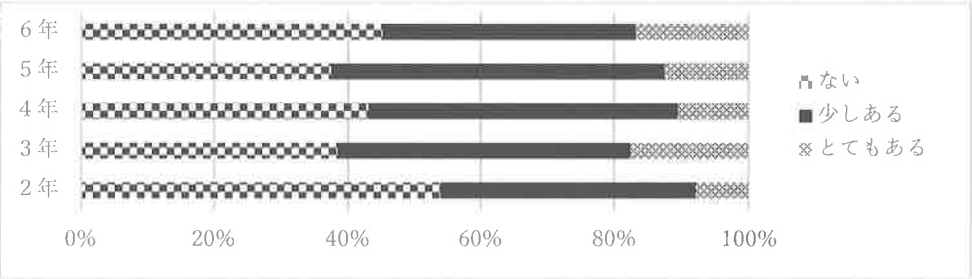


図7　なにもやる気がしないことがある

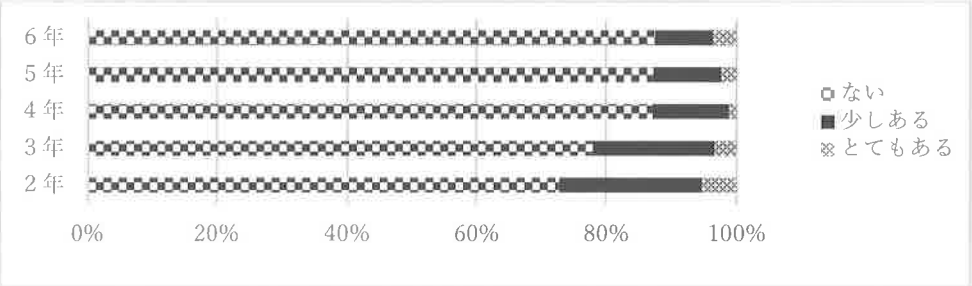


図8　ごはんがおいしくないし食べたくないことがある

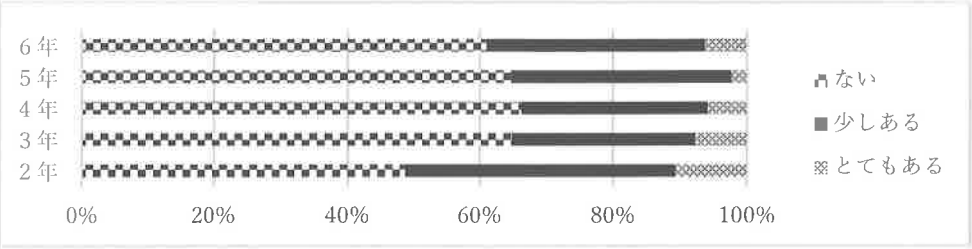


図9　頭やおなかが痛かったり、体の調子が悪かったりする

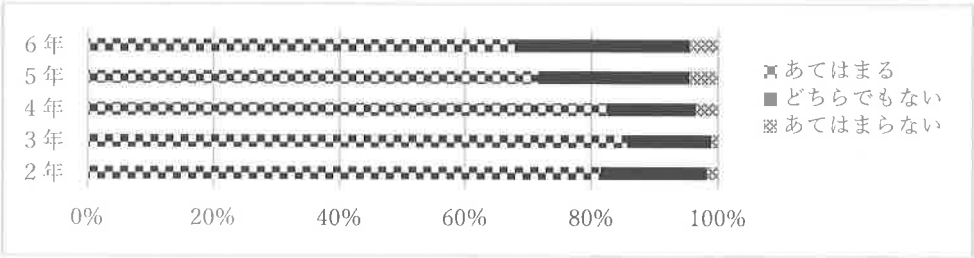


図10　手洗いはせっけんで指の間や手首まで洗う正しい手洗いをしている

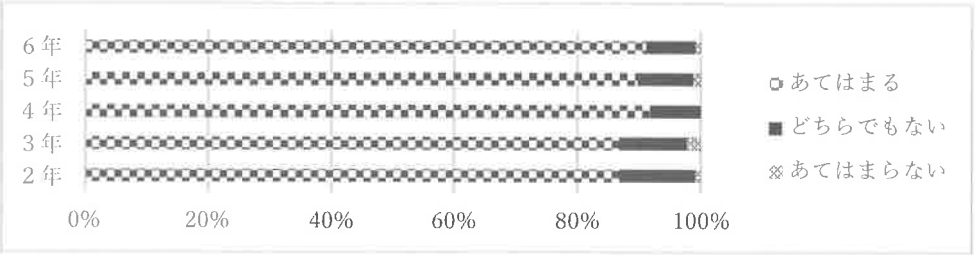


図11　マスクは正しくつけるようにしている

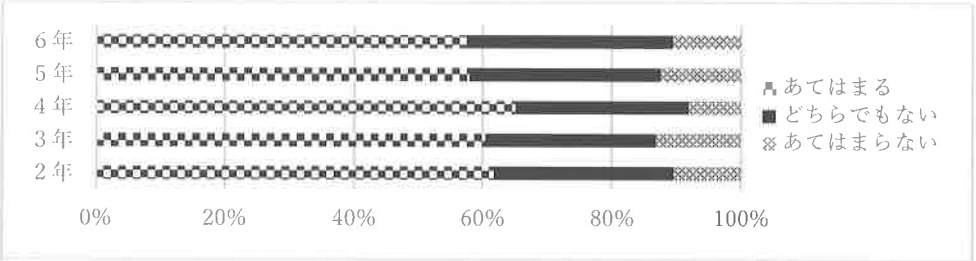


図12　家族以外の人とはできるだけ近づかないようにした

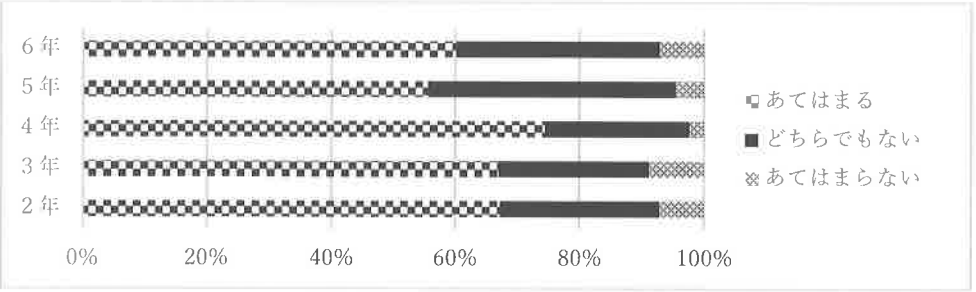


図13　人と人との間はできるだけ開けるようにした

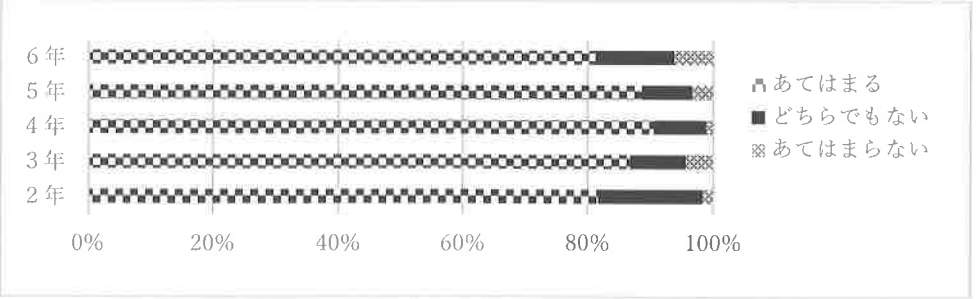


図14　朝ごはんは毎日食べている

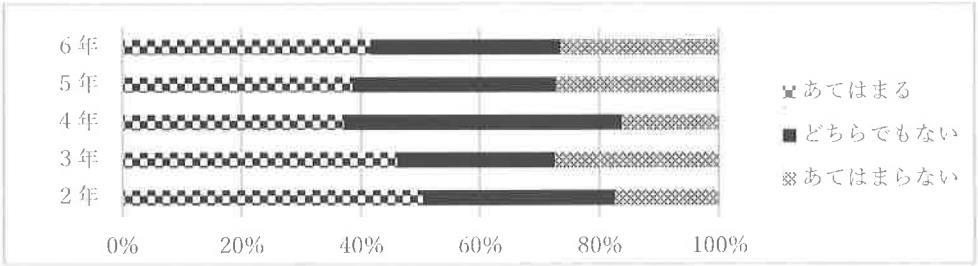


図15　毎日、寝る時間や起きる時間が決まっている

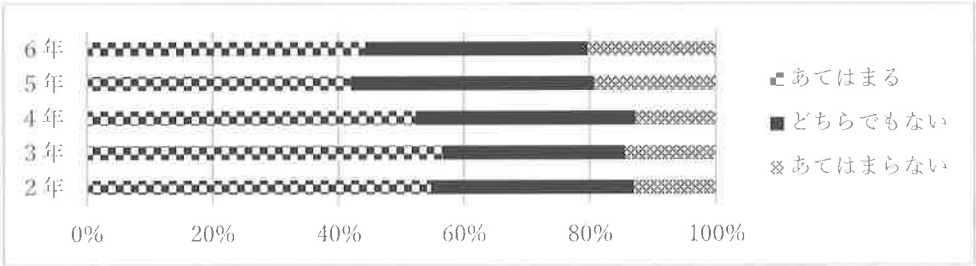


図16　ゲーム、携帯、インターネットなどをやりすぎないようにしている

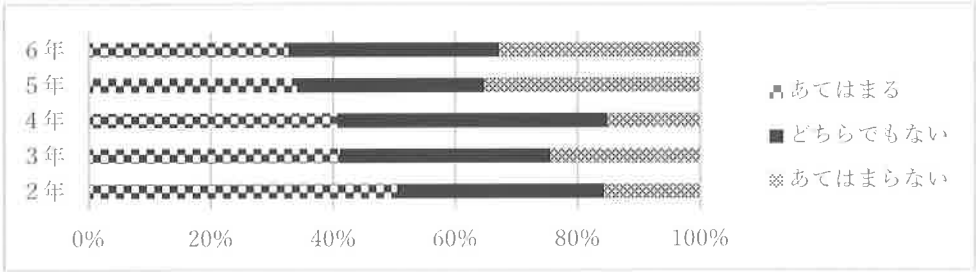


図17　自分の気持ちが落ち着くやり方を知っていてそれをやっている

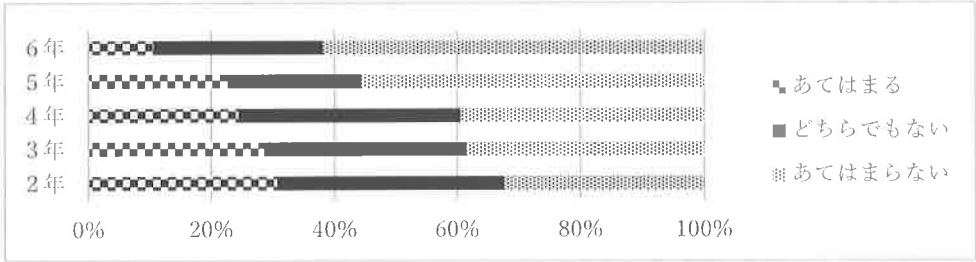


図18　だれかに話を聞いてもらいたいことがある

5. 考察

本研究においては、新型コロナウイルス感染症の感染の広がり知識については6年生、予防方法については3年生と6年生が知っている割合が高い結果となった。6年生は最高学年のため、様々な情報を理解していると考えられる。また3年生が予防方法の理解が高いのは、学年が低いほど、保護者や周囲の大人がきめ細かく指導しているためと考えられる。文部科学省[6]は、「新型コロナウイルス感染症は新しい感染症のため、正しい知識や感染症対策について、発達段階に応じた指導を行い、児童が感染リスクを自ら判断し、これを避ける行動をとることできるようにすることが重要である」と提言している。本調査結果においても、児童の知識や予防方法の習得は十分とは言えないことから、科学的知見に基づいた感染予防教育を、学年実態に応じて継続的に行っていくことが必要であると考える。

体調不良については、学年に有意差はなかった（$\chi 2(8) = 10.29045$,n.s）が、2年生のみ体調不良がない割

合が10%程度低かった。これは学年が低いほど、環境の変化が精神面や体調面に左右されやすいためと考えられる。

児童の手洗いの実践状況については、学年に有意差はなかった（χ２（8）＝11.22248,n.s）が、5・6年生において、正しくできていない割合が高かった。小島[7]は、「学年が上がるにつれて手洗いをしない場面が見られること」、また吉川他[8]は、「年齢が高くなるほど石鹸の使用率が下がり、手洗い時間も短くなる傾向がある」と報告している。今後学校生活において、正しい手洗いをはじめとする新しい生活様式に即した予防対策を定着させるため、創意工夫された指導を継続していくことが求められる。

決まった時間に睡眠をとるについては、学年に有意差はなかった（χ２(8)＝11.78993,n.s）が、2・3年生が4・5・6年生よりも決まった時間に睡眠をとる割合が高かった。またゲームなどの時間の自主規制は、学年に有意差はなかった（χ２（8）＝6.20025,n.s）が、2・3・4年生が5・6年生よりも自主規制をしている割合が高かった。これは学年が低いほど保護者の指導が入りやすく、学年が高くなると逆に指導が入りにくくなり、自分の思いが優先するためと考えられる。

ストレスに関する項目のうち、「なかなか眠れない」「むしゃくしゃしたり、いらいらしたり、かっとしたりする」「なにもやる気がしない」において、「少しある」「とてもある」と答えた児童が多く見受けられた。しかし、「自分の気持ちが落ち着くやり方を知っていてそれをやっている」と「だれかに話を聞いてもらいたいことがある」について、「あてはまる」と答えた児童の割合は全体的に低く、特に学年が上がるにつれて低くなっており、様々なストレスに対処する行動につなげていない実態が明らかになった。三浦他[9]は、「小学生においては児童の自力解決を見守る大切さがある一方で、伝え方がわからないために相談できずにいる児童への対応が必要である」と報告しており、今後子どもたちにレジリエンシーを高めるとともに、相談に関するスキルを身につけさせることが重要であると考える。

6. まとめ

本研究において、新型コロナウイルス感染症による休校中のA小学校児童の心やからだの実態調査をし、学年の傾向を調べ、考察を行った。

文部科学大臣[10]は、学校現場に対して、「子どもたちが感染症に対する不安から陥りやすい差別や偏見等を防ぐための取組についても組織的で継続的に行うこと」を要請しており、今後も感染症に対する様々な不安や課題が起こりうることを想定し、継続的に取り組んでいく必要があると考える。

以上のことから、今後の学校での取り組むべき課題を、以下のように導いた。

1. 新型コロナウイルス感染症についての学年実態に応じた感染予防教育
2. 新しい生活様式を子どもたちが自ら実践し、定着していくための指導
3. 子どもたちのレジリエンシーを高め、相談に関するスキルを身につけさせる教育

引用参考文献

1）Zhang: china CDCWeekly,Vol.41.2.pp. 145-151,2020

2）厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の現在の状況について ,2020

3）文部科学省事務次官藤原誠：新型コロナウイルス感染症対策のための小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における一斉休業について（通知）元文科初第1585号,2020.2.28

4）文部科学省:学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル「学校の新しい生活様式」，Ver.1,2020.5.22

5）文部科学省:学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル「学校の新しい生活様式」，Ver.2,2020.6.16

6）文部科学省:新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言,2020.5.1

7）小島みゆき:学校生活における子どもの手洗い実態-小学校～高校における手洗い実態調査から-,花王生活者研究センター,2007

8）吉川由希子,早川三野雄:児童の手洗い・うがいの実態とその意識についての検討―弘前市内のH小学校での調査―,第48回東北学校保健学会：2000

9）三浦祐佳他：小学校高学年児童のレジリエンシーと自尊感情,相談行動との関連性,学校保健研究,60：330-339,2019

10）文部科学大臣萩生田光一：教職員をはじめ学校関係者の皆様へ,2020.8

The effect on heart and body of the A Elementary School child by the closure of a school measures of the new coronavirus infection and future action
—It is aim for the fact-finding of the child—

Yukari KUNITOU[1)] Taiyou FUJIMOTO[2)] Masako NAKAMURA[3)]

Fukuyama Heisei University

1) Department of Health and Sports sciences (postgraduate)

2) Department of sports Health sciences

3) Department of sports Health sciences

E-mail：y.k9210515-@outlook.jp

Abstract

The study on effect on children with new coronavirus infection has not been yet considered to be it enough, and it is the present conditions that a finding is not obtained.

Therefore this study was intended that we went as a help of the education that relieved the anxiety of infection prophylaxis education and children in the school by doing the heart people of the closed A Elementary School child due to the new coronavirus infection or fact-finding, and determining the directionality of the action in the future school from the present conditions and the tendency of the school year.

As a result, there was not colonization of the prophylaxis that accorded with the knowledge about the new coronavirus infection of the child and acquisition of the prevention and a new lifestyle despite ten minutes. Also, the actual situation that we did not connect with behavior to deal with various stress as a school year rose was found. Therefore, children practiced a new lifestyle by oneself, and infection prophylaxis education ,② which accepted the grade actual situation about the ,① new model coronavirus infection raised the cash register Lien sea of instruction ,③ children to settle, and the problems that you should work on in the future school included education to make a skill about the consultation worn.

KEYWORDS：The primary schoolchild, new model coronavirus infection,
health actual situation